

日本新聞製作技術懇話会  
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也  
東京都千代田区内幸町  
日本プレスセンタービル

8階 (〒100-0011)  
電話 (03) 3503-3829  
FAX (03) 3503-3828  
<http://www.conpt.jp>

# CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER  
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.39 No.6  
2015.12.1  
(通巻 234 号)

日本新聞製作技術懇話会  
会 報 (隔月刊)  
(禁転載)



## 目次

### CONPT-TOUR2015の足跡

|                                     |       |    |
|-------------------------------------|-------|----|
| (株)かちまい印刷 印刷発送部                     | 松井 雅義 | 4  |
| 共同通信社 経営企画室委員                       | 黒澤 勇  | 5  |
| 信濃毎日新聞社 印刷局長野製作センター印刷部次長            | 古岩井和彦 | 6  |
| 中日新聞社 東京本社技術局局次長                    | 横山 和幸 | 7  |
| 中日新聞印刷(株) 豊田工場工場長                   | 荻野 政博 | 8  |
| 東日印刷(株) 印刷局印刷部部長                    | 松島 智之 | 8  |
| (株)トッパンメディアプリンテック関西 工場直属統括部長補佐      | 水黒 順二 | 9  |
| 日本経済新聞社 執行役員製作担当                    | 宮本 寿昭 | 10 |
| (株)日経首都圏印刷 八潮工場製作部部長                | 松丸 等  | 11 |
| (株)日経東京製作センター 製作担当補佐兼東雲工場印刷保全部長     | 小澤 一彰 | 12 |
| (株)日経西日本製作センター 西部工場製作部部長            | 高田 健司 | 13 |
| サカタインクス(株) 理事新聞事業部応用技術部長            | 森 貴弘  | 14 |
| サカタインクス(株) 名古屋支社営業部マネージャー           | 水本 信也 | 15 |
| ストラバック(株) 執行役員国内営業本部NS営業部長          | 長井 博  | 15 |
| 第一工業(株) 搬送システム本店技術部次長               | 平井 邦博 | 16 |
| (株)椿本チエイン マテハン事業部新聞営業技術課課長代理        | 有年 志貴 | 17 |
| (株)東京機械製作所 第一事業部国内販売グループ営業部長        | 松坂 浩  | 18 |
| 東洋インキ(株) インキ営業本部新聞インキ営業部部長          | 大谷 浩  | 19 |
| 日本アグファ・ゲバルト(株) 執行役員グラフィックシステム事業部長   | 東條 好光 | 20 |
| 富士通(株) メディア営業統括部第一営業部シニアマネージャー      | 大林 智和 | 21 |
| 富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部販売一課 | 半田 達也 | 21 |
| 三菱重工印刷紙工機械(株) 営業本部東日本支社新聞輪転機担当部長代理  | 佐々木 健 | 22 |

### CONPT-TOUR 2015 日程表 ..... 23

### 写真に見るツアー点描 ..... 24

### 楽事万歳 福井新聞社 専務取締役 福井新聞印刷センター 代表取締役社長 竹島 栄実 ..... 25

### わが職場あれこれ 福島民報社 印刷局次長兼印刷管理部長 我妻 秀一 ..... 26

### (株)毎日新聞首都圏センター 海老名工場印刷担当部長 長谷川 徹 ..... 26

### 新入会のことば キヤノンプロダクションプリンティングシステムズ(株) 取締役常務執行役員 作田 勉 ..... 27

### 第116回技術懇談会記 ..... 27

### 第68回新聞大会に参加 ..... 28

### 会員消息他 ..... 28

●表紙写真提供：「CONPT-TOUR 2015 入選作より」

日本アグファ・ゲバルト(株)・東條 好光氏「Schibsted 創業者の孫 Tinius Nagell Erichsen 氏像」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

# CONPT-TOUR2015の足跡

## 北欧の最新新聞事情を見る

2015年CONPT-TOURは、ハンプルクでのWorld Publishing Expo (WPE)を視察する前後に、久しぶり北欧の新聞事情を探ろうと、ヘルシンキ(フィンランド)、オスロ(ノルウェー)の2都市を訪ねた。北欧と言えばNIEで教育に新聞を活用するほか、デジタル事業で著名な新聞社もあって興味深い地域。今回はその三つの新聞社と二つの新聞印刷工場をめぐった。参加者は募集人員25名を大きく超える31名(事務局、添乗員各2名含め35名)となり、出発前から期待がふくらんだ。

＊

主目的であるWPEは来年のdrupaを控えていることが響き、出展規模は例年より縮小したようだ。79カ国から7,000人以上の入場者があったということだが、2、3日目を見る限り会場は閑散とした感じだった。CONPT関連企業ほか日本企業の出展は6社と少なく、ブースも出展物も控え目の印象。そんな中、WAN-IFRAのCEO代理 ワーフェルさんはCONPT-TOURを最大限にもてなしてくれた。自身による世界の新聞事情セミナーをはじめ、ランチのご馳走、World Printers Forumセミナーへの無料聴講、先頭に立ち日の丸を掲げての会場案内など、有難さを感じると同時に申し訳ない接遇であった。セミナーでは世界の新聞の部数下げ止まりを例示し、オンラインともども新聞の先行きは明るいと強調した。また印刷業界はデジタル印刷機を使って国際協力し、紙の価値を再発見しなければならない時代だと持論を展開した。

＊

ツアー2日目、ヘルシンキ郊外170<sup>キ</sup>にあるAlma Media社の工場を訪問した。朝6時半にバスでホテルを出発、この日は一挙3か所を

回るハードなスケジュールとなった。Alma工場は一昨年稼働したばかりのモダンな作りの新鋭工場で、欧州の工場コンセプトを見ることができた。大規模、環境配慮、良好な作業環境などだ。大規模、多媒体受託印刷というのは5日目に見たオスロのSchibsted工場も同様だが、オスロの方は1998年稼働の工場で設備の変遷をうかがえた。ヘルシンキ市内に戻りAlma本社を見学。ドイツの新聞社と同じく、デジタルに軸足を移して収入を補完している。Helsingin Sanomat社も紙とデジタルの融合に余念がなかった。テレビ界から女性編集長をハンティングし、ビデオコンテンツの強化を急いでいる様子を見聞した。

5日目にはオスロのSchibsted社で欧州30カ国にオンライン展開する現状を聞いた。オンラインによるクラシファイド広告(不動産、リクルートなどの案内広告)にビジネスチャンスを見出し、紙と合わせグループで年2,200億円超を稼ぎ出している。ビジネス紙VGのオンライン版では読者の閲覧状況をリアルタイムで解析できるシステムを駆使しているのが目を引いた。

＊

今回のツアーもトラブルはなく、10月4日(日)に出発し11日(日)無事に帰国できたのはなによりであった。今年の会の名称は、オスロがノーベル平和賞発表当日だったことに因み「イグノーベル会」となった。ただの「ノーベル会」でないのがミソとか。団長の太谷さん、副団長の長井さん・佐々木さん、現地報告者の黒澤さん・小澤さん・竹内さん、幹事を務めてくれた島谷さん・半田さん・足立さん、通訳をお願いした東條さんに心からお礼を申し上げます。  
(事務局)

## イグノーベル。賛成です

(株)かちまい印刷  
印刷発送部

松井 雅義

初めてのCONPT-TOUR参加。そして初めての海外渡航。パスポート申請に始まり準備を進めていくうちに、期待と不安が入り乱れた、一種独特な気持ちを今でも覚えています。普段のだらしなさというのは、旅をしている時に出るもので、リュックに入れた物が何処にあるのか分からず、常に手をつっ込んでいた記憶があります。また、10時間という想像できないフライト時間をどのように過ごすのか？時差ぼけは大丈夫なのか？先々の事はあまり心配しない質なのに、今回ばかりはそんな細かい事を気にしながら成田へ向かっていました。

\*

その心配事を解消したのは、音楽でした。暫くJAZZやフュージョン系の音楽に傾倒していた私なのですが、今回はヘヴィーメタル縛り、それもヨーロッパ・北欧地域のバンドを詰め込んで、飛行機の中で聴き倒す。アドレナリンを最大にして、いざヘルシンキへ。十勝地方では防風林として生い茂っているカラマツ・白樺の木々が、堅い岩盤の隙間から力強く生えているさまを見て、生命力の強さを感じ、何故か故郷に帰ってきたような錯覚をしていました。ただし、ここは北欧。とても低く奥行きのある空、疲弊した身体に刺すような太陽光線。牧歌的な風景の中に、ディストーションが効いた力強い主張を体験出来ました。

\*

世の中の潮流は、どのような世界に属しているとしても、「何でも出来る人材」が必要とされています。技術だけを追ってきたスペシャリストも、硬い殻を割り、ジェネラリストへと変化をしなければならない。北欧の新聞

社メディア企業もそんな苦悩をのぞかせていました。これからの時代を生き抜くには、そのような容量が見えない要求が、あると思います。ですが、「マニア」であってはいけません。訳ではなく、特定の分野を突き詰める事も際限なくあると、私は普段から思っています。今回ご一緒させていただいた方々のマニアっぷり、人となりを感じさせていただき、エネルギーをたくさん蓄えて帰国する事が出来ました。「人々が飛びつくコンテンツをマニアックに追求していく」。まさしく「イグノーベ



ラディソンBLU・スカンジナビアホテル  
からのオスロ市街

ル会」という同窓会名にふさわしい方々に巡り会えた事を、幸せに感じています。これからも「ブレイキング・ニュース」を様々な形、様々な立場で発信するマニアとして成功する事を切に祈っております。

\*

弊社は毎年このツアーに参加させていただき、貴重な経験をさせていただいております。改めて感じた事は、様々な方の様々な準備、ご考慮を頂いて、安全で重厚な旅が出来ているという事です。私のような海外未経験者が、無事に帰国し、こうして、会報記事も書かせていただけるのも、日本新聞製作技術懇話会さまをはじめ、様々な方のおかげでございます。この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 未来を感じた新しい技術

共同通信社  
経営企画室委員

黒澤 勇

今回のツアーは移動総距離18,370kmで、過去のツアーからみてもそう多くない距離に思えるが、移動交通手段に飛行機をすべて利用し、思ったより過酷なツアーであったと感じている。参加メンバー33名(JTB添乗員含まず)もそう思ったのではないかと思う。早朝午前4時にモーニングコール、ロビーに午前5時過ぎに集合し、移動開始等々、説明会で受けた内容よりハードスケジュールだった。その中、誰一人遅れることなく33名がスケジュール通りに視察をできたことに、このツアーの参加者は、全員が強者だったのではないかと感じている。ヘルシンキでは、バスを2時間近く移動し、気温5度以下の印刷工場視察をした。工場周辺には何もない場所で、こんなところで新聞を印刷してどのように運送しているのかなど不思議に思った。しかし、配送には工夫がなされており人間の知恵とはすばらしいものだと感心した。



Alma Media社の工場

その後、ヘルシンキの新聞社を2社視察し、翌日にはWorld Publishing Expo（通称WPE）視察のためハンブルクに向かった。WPE会場では、WAN-IFRAのワーフェルさんに絶大なるウェルカムオープニングをしていただき大変有意義な時間を過ごすことができた。私にとってハンブルク・メッセは3回目です。勝手を知っていることもあり、展示会場を1.5日間自由に視察ができた。今回のWPEで気になったのは、CCIヨーロッパのブースで紹介さ

れた未来を感じた新しい技術に遭遇した時だった。スタートアップ企業になるが、音声技術を利用した「アマゾンエコー（AmazonEcho）」と「アップルウォッチ（AppleWatch）」だった。スマホを両手から離して身に着けるデバイス、ウェアラブルコンピュータを利用してニュースコンテンツと接するという技術だ。スマートフォン・タブレットでもアップルの技術のシリ（Siri）、グーグルの音声サービスなど音声技術の向上は目まぐるしく進化している。我々も同じような環境にいるわけであり、こういった技術をもっと研究する必要があると感じた。

WPEでは多種のフォーラム会議が開催され白熱した議論がされていた。まだまだ我々は前進していかないといけないと思ったしだいだ。

WPE視察後、さらに北に移動しノルウェー・オスロの新聞社を訪問した。ここでもデジタルの取り組みをいろいろと勉強した。やはりビジネスはまだ紙に依存されていたが、コンテンツとしては、テキスト、写真のほか、動画、グラフィックスなど幅広く紙以外にもデジタル等々に応用できる制作に力を入れていた。オスロでも子供新聞を制作しており、その他に女性、健康、生活などのコンテンツに力を入れているところなどは日本と同じではないと感じた。

＊

今回のツアーでは、ご一緒させていただきました皆様にはこの場を借りて感謝したい。オスロ市



内で見かけた光景だが、新聞が街中で多く見受けられ、写真（左）のように購読申込を受け付けていた。ちょっと懐かしい感じがしたが、日々我々の発信しているコンテンツが読者に感動

を与えることができれば最高であると思った。

33名の皆さん、JTB添乗員の方々本当にありがとうございました。

## とにかく回ってきた

信濃毎日新聞社

印刷局長野製作センター印刷部次長

古岩井和彦

「古岩井君ちょっといい？」

局長に呼ばれるということは、決していい話ではない。安全委員長としてちゃんと仕事しろとか、次長としての責務が云々とか…。

しかし、今回ばかりは違った。「CONPT ツアーに参加せよ」とのこと。本当は印刷局次長の番だが、のっぴきならない理由とのことで辞退され、自分に順番が回ってきた。

＊

今回のツアーは、欧州3カ国を回る6泊8日の日程とのこと。上司が「俺のときは5日だった」（あまりに厳しいスケジュールのせいで「タイト会」という名前がついているらしい）などと嫌味を言うてくるが、自分に責任はない。日ごろのうっぷんを晴らすべく、名物のビールやらワインやらを目いっぱい楽しもうと思っていた矢先、「あ、そういえば新聞技術に視察報告を書くことになっているから」。

ガーン。頭の中で何かが割れる音がした。「いま執筆って言いました？」聞き間違いじゃないかと思って何度も聞きなおしたが、局長はニヤニヤしてこちらを見るばかり。執筆って記事を書くやつですよ？ムリムリ、絶対ムリ！！！！…といっても決まってしまったものは、ひっくり返らないようだ。なんとも大変なものまで回ってきてしまった。

＊

不安いっぱいの中、いよいよ視察スタート。すべては記事のために、取材にはカメラ3台、ボイスレコーダー2台の態勢で臨んだ。一見過剰な設備のように思われるかもしれないが、最初の訪問先フィンランドで私と日経の小澤さんが、木村禮さんに預けたボイスレコーダーが2台とも録音失敗に終わっていた件を思い出すと、新聞社の設備と一緒に二重化

三重化は必要だと再認識した。2日目はドイツに移動し、ワールド・パブリッシング・エキスポ2015を視察した。エキスポ会場で訪問団向けセミナーを受講した後、展示会場の各ブースで説明を受けた。1日目だけでは視察報告に書く十分な情報を得られず、次の日も展示会場を時間が許す限り見て歩き回った。英語の障害は東條氏におんぶに抱っこ。深く感謝しています。

再び北欧に戻り、最終視察先のノルウェーの新聞社と印刷工場を駆け足で回った。デジタル色の北欧だと思ったが、こども向けには紙の新聞を発行するという日本と同じ取り組みに少し安心した。

＊

視察も終わりツアー最終日。異国の文化や価値観、街の景色や歴史などにゆっくりと肌で感じる時間がようやくもてた。オスロ市庁舎やノーベル平和センターを見学したり、ムンクの「叫び」が収蔵されている国立美術館などをじっくり鑑賞することができた。このときばかりは、報告書を忘れてツアーを少し楽しめた。

＊

さて、肝心の視察報告だが…詳細は新聞技術を参照していただくとして、北欧諸国の新聞事情、最新の設備などを見て、この業界は「装置産業」だという思いを深め、あらためてメーカー各社の皆様の努力の上に成り立っていることを思い知らされた。いつも勝手なことばかり申し上げているが、この場をお借りして深く感謝したい。

最後に、今回あらゆる方々に原稿への協力依頼をし、おかげさまでたくさんの素材が私の手元に集まっています。その情報の多さに目を回しているところではありますが、あらためてツアーの仲間のありがたさを痛感しております。本当にありがとうございました。

## 一眼レフを携帯、愚作を紹介する

中日新聞社 東京本社技術局局長

横山 和幸

CONPTツアーでは一眼レフカメラを携帯した。カメラを首から下げた姿は一見して旅行者とわかる。周囲の視線をよそに、撮り続けた愚作を紹介する。予めお断りしておく。個人のプライバシーに抵触しそうな写真はあえて掲載を諦めた。本当はそっちが面白かった。

【初日】

(右)ヘルシンキ空港着陸アナウンスが機内に流れた直後の写真。日本と違いゴルフ場は見えなかった。いよいよ始まるぞ。



【2日目】(左)アルマメディア社のタンペレ印刷工場に向かう途中、我々を出迎えてくれたのは真っ青な空に浮かぶ、いわし雲。北欧大地の神々しさを感じた。

【3・4日目】ドイツ・ハンブルクへ渡りWPEの視察。4日目の午後は少し時間が出来たため繁華街を散策した。地下鉄に乗って4つ目「Reeperbahn」の街はビートルズ結成の地。少しいかがわしい所が日本の新宿・歌舞伎町にも似ていた。おまけの写



真も用意した。飾り窓の入り口、と聞けば生唾を飲む音が聞こえてきそう。一度門をくぐれば写真撮影は厳禁。お伝えできないのが残念(左下)。

雨が降っていなければ武勇伝を語る人も増えたのでは。

【5・6日目】はノルウェーの首都オスロ。新聞社のシブステッド社を訪ねたのだが見当たらない。歩行中の現地の方に訪ねても首を傾げる始末。結局たどり着いた所は大きな建物。なぜ知らないのか(右)。



最終日は恒例の日本食会。出されたのはすき焼き。割り下は多少甘く感じたが、うれしかったのはたっぷりの野菜。



特に白菜は我々の胃腸を癒してくれたに違いない(上)。

最後に番外編。ツアー期間中休みなく営業していた居酒屋があった。我々が足繁く通った店の名は「居酒屋半ちゃん」。店主が持ち歩いていた大量の酒類(右)とつまみはどうなったのか。尋ねてみたかった。





## 日本の新聞の高品質を再認識

中日新聞印刷(株) 豊田工場工場長

荻野 政博

今回、当社からツアーは初参加です。今後の参加者に引き継ぐためにもしっかり仕事をしなければ、と考えながら事前説明会に参加しました。その場でもたくさんの方々にお会いし、特に役割を担っていただいた方々のお陰があることにも感謝しつつ出発の日を迎えました。

成田空港出発の際には離陸寸前に急病人が発生し、駐機場へ戻るというハプニングがありました。騒がれる方もなかったようです。とはいうものの私はオスロ空港で手荷物チェック時に再審査にはじき出され、搭乗に間に合わないのではとドキドキさせられました。何も問題はなかったのですが、対応には言葉の壁が大きな障害となるため、慎重にしないと、との思いもあり、冷や汗をかきました。

\*

視察したフィンランドのヘルシンキ新聞、アルマメディア社、ノルウェーのシブステッド社を含め、北欧の新聞社が電子メディアに力を注いでいる様子が伺われ、紙の新聞を守りながらも収益を維持している様子が伝わってきました。ヘルシンキ新聞の説明に20年ほど前に47万6千部と北欧最大の発行部数を誇っていたものが昨年28万5千部へと4割も減少したとの報告は衝撃でした。印刷工場はフィンランドのアルマメディア社、ノルウェーのシブステッド社とも複数の銘柄を印刷して頑張っている様子が見られ、特にインサーターの活用が目につきました。入手したヘルシンキ新聞もタブロイド判のステッチャー（ホチキス）止めしたブロックが外側から32頁－20頁－32頁－20頁と4つ重ねられていました。ただ、新聞の品質の面では問題を発見してしまいました。アルマ社のタンペレ工場から戻る途中のドライブインで販売されていたヘル

シンキ新聞発行のイブニング紙の新聞束を見ると折り目の部分に大きなシワが入り、折り込まれた際に対向する面の紙面が汚れとなって文字が読み辛い状態の新聞が多数平気で並



べられていました(写真上)。日本では考えられない品質であることに驚かされました。

\*

視察ツアーが無事に終了したことを社のトップに報告する機会がありましたが、現地の社会に接することの大切さを言われ、反省するところも多くありました。北欧といえばサウナですが、経験する機会を逸していました。しかし、連日の部屋飲み「居酒屋はんちゃん」を富士フィルムの半田さんが開店していただけたお陰で参加の皆さんと心置きなくお話しさせていただきました。今後もよろしくお願い致します。

最後にたくさんの先輩方が参加され、歴史あるツアーへ参加させていただけたことに感謝申し上げます。今回参加の皆様にも大変お世話になりました。ありがとうございました。

## やっぱり日本の食事が一番

東日印刷(株) 印刷局印刷部部长

松島 智之

ある日、上司から突然、封筒を手渡された。薄々は察していたが、コンプトツアー参加の吉報だった。詳細を確認すると、欧州視察との記載あり。行き先の内容を確認すると、フィンランド・ドイツ・ノルウェー8日間の視察内容だった。海外へ渡航経験は、16年前の



新婚旅行以来だ。日本語も堪能でない私が言葉の壁と慣れない海外旅行で不安が膨れ上がったことを思い出す。心の中では、日常の業務から短い期間だが現実逃避できる喜びと帰国後の日常業務への不安を考えたのも事実である。私にとって初参加となるコンプトツアー2015が9月16日の説明会を皮切りにスタートした。説明会終了後、早速懇親会を開催。お陰で緊張が解れ、視察団メンバーの皆さんとツアーに参加できることに喜びを感じた。準備を着々と進めパスポート取得、荷造りを終了させ出発日を待つばかりだった。出発当日は集合時間より1時間早く成田空港に到着。まだ誰も居ないよなーと感じながら集合場所に行くと既に数名が集まっていたことにビックリ。続々と視察団が集合し結団式を開催。総勢33名が欧州に向けて出発した。

\*

エコノミーだから中央や窓側の席は嫌だなーと思っていたら、ラッキーな事に通路側。しかも前の座席がない。足も伸ばせて快適な10時間半のフライトを楽しめた。唯一、残念なのが席に設置してあるモニター（ビデオなど見る）がない。（後で聞いたら座席下に有ったらしい）まあ、仕方ないなーと納得したが、やる事も無く、寝る事も出来ず、ヘルシンキ空港に到着した。私は愛煙家。空港に着くと喫煙所を探し、一服した。こんなに煙草が美味いと感じたのは久しぶりだった。長時間吸わなかった為か、頭がクラクラ。改めて煙草は体に悪いと痛感した。初日の全体夕食会はお酒も入り親交も深まった。翌日からはハードなスケジュール。毎晩早めに就寝したが、なかなか寝付けず寝不足の視察となってしまった。参加者の一室で宴を開催していたが、最終日の一日しか参加できなかったのが心残りである。フィンランド、ドイツ、ノルウェーと滞在し各国での食事を堪能したが、やはり日本の食事が一番美味いと感じたのは私だけではないと思う。フィンランドでは有名な

レストラン、ドイツでも人気のレストラン、ノルウェーでは日本食を頂いたが豪快な味付けと物価の高さにはビックリの連続だった。お酒だけは万国共通で美味しかったなー。お疲れモードで新聞社視察、World Publishing Expo見学と噂通りのツアーだったが、あっと言う間にコンプトツアーが終了した。帰国後は真っ先に和食のレストランに直行。麦とろメカジキ照り焼き定食を注文。やっぱり日本が一番だと感じた。今回のツアーご参加の皆様との出会いに感謝し末永くお付き合いとご指導をいただきたくお願い致します。

## ビートルズの故地に行けた

(株)トッパンメディアブリントック 関西  
工場直属統括部長補佐

水黒 順二

長いようで本当に短かった8日間、皆さん職場復帰問題無かったですか？私は時差ボケ解消まで結構時間かかりました。今でも北欧の風景がありありと浮かんできますね、いい出張でしたね！

訪問先の北欧2カ国とドイツは今回の機会でも無ければおそらく生涯行く事はなかった国だと思います。10時間のフライトで欧州への旅程も初めてでした。

成田発ヘルシンキ行便の中でフィンランド語の「キートス＝ありがとう」を必死に暗記し到着後降りる際に使ってみました。CAさんが愛らしい笑顔で答えてくれたのが北欧視察のスタートとなりました。

\*

北欧のフィンランド・ノルウェーでは、日本とほぼ同じ面積の国土に非常に少ない人口の中、人権意識・社会保障・教育水準・環境意識・新聞普及率等が非常に高く、国民の幸福度も世界一・二位を争うほどで、ある意味「先進国」と聞いています。その国々の中にある新聞社・新聞印刷工場を視察出来た事は大

変意義深いものでした。その中でもヘルシンキ郊外のAlma media Tampere工場は北欧らしい自然と調和しながらも工学的に洗練されたデザインで統一されており、かつ人に優しい部分が感じられる温かい雰囲気のある工場でした。



Hamburg Beatles Platz

稼働開始後3年経過していますが工場内は驚くほど明るく美観も維持されていました。根底には高いレベルの環境意識があり資材のリサイクルや工場内の作業環境にも活かされていました。国の基準よりも高い独自基準の設定の話、新たな理念や施策を常に進めていく姿勢に持続可能性という言葉が思い出されました。

＊

北欧2カ国新聞社の編集部門は、部数減の危機感の中、デジタルファーストの新聞製作システム改革が進行しておりデジタル需要と課金問題の解決が現在強く求められているようでした。また紙媒体の存在価値と再評価で盛り返しの雰囲気もあり、混沌とした状況が感じられました。ハンブルクWPEでの講演テーマもまさに「新聞印刷の将来」で世界的な印刷事情報告では悲観論よりむしろ積極的再発見、デジタル配信の中での出力選択肢の中でのプリント(印刷)の優位性を活かすべきだという話でした。勇気づけられていいのやら悪いのやら歴史に判断を委ねます(?)。

＊

ハンブルク市街では念願のソーセージを屋台で食べる事が出来、ビートルズゆかりのレーパーバーンで記念写真を撮れた事は中学生時代からのファンとしては個人的ハイライト

となりました。帰りの地下鉄では列車を乗り間違え、オスロでも威勢よく路面電車に乗り込んだのはいいのですが案の定行き過ぎ、歩いて帰りの道すがら行きずりのBARで痛飲した事もいい思い出となりました。最後に今回のツアーを企画運営された皆様、参加された皆様に心から厚く御礼申し上げます。一生の思い出となりました。今後とも末長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

## 新聞印刷の将来垣間見る

日本経済新聞社 執行役員製作担当

宮本 寿昭

海外に行くと必ず思うことがあります。「英語の勉強をしよう」。でも帰国して必ず忘れることがあります。英語の勉強です。CONPTツアーでも同じことを繰り返してしまうようです。「まあ、どうにかなるだろう」。いつまでたっても成長しない自分にあきれるばかりです。

湾岸戦争があった1991年の12月に米国に出張して以来の海外。引き出しの中で眠っていた期限切れのパスポートにはまだ髪の毛が黒々としていた20歳代の自分がいました。新たに取得したパスポートの写真はどう見ても白髪の老人。成長はしなくても年だけはとったことを痛感しました。

＊

今回のツアーで最も印象に残った言葉と光景を一つずつ振り返ってみます。

言葉のほうはフィンランドのヘルシンギン・サノマット社の女性幹部が新聞の将来について問われ、「紙ではない。時間はかかるが」という返答です。WAN-IFRA副CEOの「新聞はアジア、アフリカ、中南米で拡大している。北米、欧州、オーストラリアは減少しているが、北米のマイナス幅は安定してきた」という楽観的な見方には違和感を覚えましたが、彼女の言葉は高齢化の進展する先進国ゆえの

見解だと感じました。

女性幹部が悲観的にこう発言したのかは興味のあるところです。彼女は紙の新聞に携わったことのない、テレビからスカウトされた人材だったからです。オンライン戦略のリーダーであり、オンラインビデオなどに注力していると説明してくれました。自分の子供もタブレット端末から情報を得ているそうです。

彼女の発言に深刻な危機感を感じなかったのは私だけでしょうか。「読者の変化に対応するだけ」。そんな冷静な信念が伝わってくるようでした。30年以上も紙の新聞に接し、これからも紙とともに歩む自らの立場としては、過去にとらわれない柔軟な発想で生き残りを考えるしかないとの思いを強くしました。

\*

光景のほうは日本の新聞印刷工場とは様相の異なる印刷工場です。10台以上のタワーや何台ものインサーターが並ぶ工場は、商業印刷と新聞印刷が合体したような大規模なものでした。一つの工場で複数の新聞やPR紙を刷ったり、ライバル関係になったメディア企業が共同輸送会社をつくったりするのは大いに参考になりました。

日本ではまだ、落ちたとはいえ大量の部数を短時間で刷り上げる新聞印刷が工場の最大の使命です。それでもやがては共同印刷・輸送の時代がやってくるのでしょう。北欧の工場の姿は、来るべき日本の新聞印刷工場を垣間見たように思えました。ただ紙粉が堆積しているのに気につけないところは日本では考えられません。

10月初旬の冷たい夜風にもかかわらず、30人を超す団体ツアーの夜は熱く盛り上がりました。普段見られない人柄も知ることができ、再会の日が楽しみです。

## 40媒体超す印刷に驚く

(株)日経首都圏印刷 八潮工場製作部部長  
松丸 等

私のCONPT-TOURのスタートは、8月下旬に今年のCONPTに行つてほしいから『頑張つて勉強してこい!』と上司から耳打ちされた時からだった。海外旅行の経験の少なく、外国語も喋れず日本語も満足に使えない私が『海外? CONPT!』。想定外の事態に半分パニックに。しかし、決まった事はしょうがないと腹をくくり、先輩たちから話を聞くと、すると『移動距離が長い・ハード・疲れる』という回答ばかりで、参加する前から憂鬱になってしまった。

10月4日のツアー初日。結団式や搭乗手続きを無事に済ませ8日間の研修が順調に進むと思った矢先、滑走路で離陸の順番を待っていると『機内で急病人』のアナウンス。ゲートに引き返し約1時間遅れでの離陸。出だしから不安なスタートとなった。予定より1時間遅れてヘルシンキに無事到着した。ホテル到着後に全員でステーキの夕飯。ヘルシンキは夜の20時だが、日本時間では午前2時(時差6時間)長旅と時差でヘビーなスタートだった。だが、アルコールが入り良い気分になり完食。食事とアルコールのおかげで睡眠も十分に取れ翌日からの研修は万全の体調で臨むことが出来た。

\*

ヘルシンキでの訪問地は、ヘルシンキ・サノマット社とアルマメディア社の印刷工場を見学。工場は、稼働から3年弱の新しい工場で、周辺も緑に囲まれた静かな環境に位置している。工場環境に対する取り組みも、国の基準より厳しく設定、廃棄物は「ほぼゼロ」と胸を張っていたのが印象的だった。輪転機はマンローランド社製で、8T(タワサテライト)+3F(ホルダー)で、1Fに対してオペレーター2名、6名で3媒体を同時に印刷。40を超す

媒体を印刷していると聞き驚かされた（インサーターを使用したセクション印刷）。発送フロアは、印刷フロアの下で給紙部と同フロアに位置しているなど見るものが全て新鮮に映った。

二カ国目のドイツでは、『World Publishing Expo 2015』を見学。新聞印刷の現状の講演では、日本同様に部数減が報告されたが、新聞の持つ可能性や地域によっては部数が伸びているなど明るい報告もあった。会場は日本と違って展示物がほとんど無く、モニターによる説明がほとんど。商談がメインでテーブルを囲み手にはビールとワインを握っている光景に懐かしさを覚えた。

最後に訪れたフィンランドでは、シブステッド社の印刷工場を見学。この工場は稼働16年と古く設備の延命工事を計画的に行っている。昨年はキャリア関係の電気設備を行い、今後は輪転機設備の延命工事をを行う予定で工事後も10年以上使用できるように整備を行うと話していた。印刷部数減など新聞を取り巻く環境が厳しくなる中、工夫をしながら設備延命を進めている姿は世界共通であると改めて感じた。

今回のツアーに参加させて頂き、多くの出会いができたことに感謝いたします。また今後とも末永くお付き合いご指導を頂きたくよろしくお願いいたします。

## 北欧メディアの状況報告の前に

(株)日経東京製作センター

製作担当補佐兼東雲工場印刷保全部長

小澤 一彰

「コンプトツアー、どうだ？」と上司から話があった際、「いやー、枕が変わると眠れないタイプなので長期出張はちょっと…」と断るような返事をした私。帰宅途中で書店に立ち寄り、北欧のガイドブックをペラペラ眺めているうちに心変わりし、その翌朝、上司に

「行かせていただきます！」。

訪問した3ヶ国はいずれも英語がある程度通じること。しゃべれない私にとって安心材料というわけではないが、まあ1人で出歩くわけでもないし。なのに…。

＊

ハンブルクでのWorld Publishing Expo見学时に早速、語学力のなさを露呈。カタログをもらうだけでも一苦労。また、あるメーカーの営業担当者が英語の分からない私を相手に熱心に説明してくる。どこで区切りをつけていいかも分からず、ただただ愛想笑い。

さらにその日の夜、ビヤホールでおいしいビールを堪能した後のこと。お土産にビアグラスを買って店を出ると一緒に来ていた10数人が誰もいない。あっ、置いてきぼりだ。うーん、困った。分かるのはホテルの名前だけ。祈るような気持ちでタクシーに1人で乗車。せっかく乗ったベンツのタクシーもくつろげなかったが運良くボラれずホッ。

それでもツアー期間中、北欧の雰囲気よさに気持ちは和らぐ。ヘルシンキはムーミンやサンタのふるさとらしく、街中には穏やかな雰囲気が漂っていた。オスロではムクの「叫び」を鑑賞し、また訪問当日、現地ではノーベル平和賞の発表があり、ノーベル平和センターで過去の受賞者の偉業に触れるなど、心豊かになった。

＊

またハンブルクでは現地ガイドさんの「ここにいるのは日本のプレスの人たちだ」という強烈な押しのおかげ(?)で市議会場内に入場して、FIFAに関するハンブルク市長の声明を聞くという、めずらしい機会に恵まれた。

あと1つ、チョコレートのお話をしておきたい。北欧はチョコレートがおいしい。お土産はドイツワイン、という会社の期待を全く無視して買うのはチョコばかり。ツアー途中からスーツケースを開けるたびにほのかに甘い香りがした。



### 「ゲイシャ」という名前の北欧のチョコレート

そろそろ本題のメディア関連の話もしておかないと、と思ったが原稿のスペースが尽きてきたようだ。報告会担当の大役を仰せつかっておいまして、真面目に見学はしたのですが…。良き参加者に恵まれ、つい本題以外の楽しかったことを先に思い出して記したことをご容赦願いたい。

最後に事務局の皆様、ツアー参加者の皆様、関係各社に大変お世話になったことをこの場をお借りして感謝申し上げます。

## 新聞印刷への思いは世界共通

(株)日経西日本製作センター  
西部工場製作部部長

高田 健司

「北欧らしいぞ。CONPTツアーに行ってみないか」最初に上司に話をもらい、「北欧！行ってきます」と二つ返事で参加する機会を得た。海外旅行には縁遠い私にとってパスポートを使うのは2回目、生涯最初で最後となるであろう北欧諸国をめぐる旅がはじまった。愛煙家の私にとって、10時間のフライトでの禁煙はつらいものがある。どう乗り越えるか考えたが結論もなくそのまま飛行機に乗り込んだ。ヘルシンキに着き、まずは一服。見渡すと周りには外国人ばかり、ようやくどこに居るのかわかってきた。沖縄でも北海道

でもない。ロシア上空を飛び越えてフィンランドに着いたのだ。バスの車窓からは雑誌でみたことのあるような風景が続く。フィンランドにいることの実感が湧いてきた。

\*

最初の視察はSanomat社とAlmaMedia社、北欧の新聞事情も日本と同じ状況が浮き彫りになっていた。紙を大事にする姿勢も伺えたが、某社はデジタル中心に収益を伸ばしていく考えのようだ。新聞印刷に関わる人間にとっては耳を疑う話だったが、勝算があるのであろう。デジタルは日本も力を入れているが、北欧はまだ実験的な印象だ。アルマ社の工場はまず外観がオシャレ。北欧デザインと言っても言うのか、工場らしからぬ佇まいをしている。

輪転機の詳細を見ることができず非常に残念だったが、紙面品質管理にも力を入れていることがうかがえた。しかし、インサータで幾重もの新聞を束ねると、セットオフやシワができ、せっかくの品質が損なわれるのではないかと疑問が今でも拭えない。そこは日本との美意識、価値観が違うのであろう。

\*

ドイツ・ハンブルクはユニークな街だった。もう行く機会はないだろうが、様々な話を総合するとプライベートで行ってみたいと思う。

ホテル近くの小さな商店でお土産になるものはないかと物色した。ドイツにもあるんだと思いながらインスタントラーメンを3つ購入。料金を払うときに私の和製英語が通じない。ドイツ語だ。やはり誰でも英語が話せるわけではないことを理解した。

WPEでは新聞印刷に関わる世界の状況を目の当たりにすることができ、紙の新聞の重要性を強く感じる事ができた。展示の中で非常に興味を持ったのは、水無し刷版専用の輪転機だ。熱対策を施した機械らしいが、今後の動向に注視したい。

ノルウェーのオスロでは、ノーベル平和賞授賞式の会場に足を踏み入れることができ感動。受賞した方々が踏み入れる先に、あの階段を歩んだことは一生の思い出となった。

視察した工場は老朽化していたが、部品を更新して延命を図っているようだ。我々、日本の新聞印刷工場も事情は同じ。延命して輪転機を使っていくことはもはや世界共通だと痛感した。驚いたことが一点。印刷マンが版かけ作業をしていたが、床と輪転カバーに刷版を立て掛け、その版を足でひょいと持ち上げていた。版キズは気にならないのだろうか。お国柄なのか、我々日本の新聞印刷マンの丁寧な仕事に誇りを持った一瞬だった。

＊

CONPTツアーで出会った皆様と有意義な時間を過ごすことができ、すばらしい経験をさせていただきました。このような機会を与えて下さった皆様に感謝申し上げます。

## 路面電車に感動

サカタインクス(株)  
理事新聞事業部応用技術部長

森 貴弘

初めてコンプトツアーに参加させて頂きました。行き先は、北欧。心ウキウキ気分を「仕事・仕事」と自分に言い聞かせました。

北欧のイメージは、寒いところ・福祉国家・税金・バイキング(チョット野蛮)ぐらいで、早速トラベルガイドを探しましたが、非常に少ない。大した下調べもしないで、「いざ、出発！」結団式を終えたぐらいから、気持が高揚して来て、案の定、機内では、ほとんど眠れないまま、ヘルシンキ空港へ到着。「やっぱ、寒い」ヘルシンキは、赤松林と白樺と広大な緑の平野に歓迎され、これが「北欧か！」と、まず感動。時差ボケの頭がひっくり返りました。

Helsingin Sanomat社は、郊外の工場地区で、とてもきれいな佇まいの工場。工場の方々の非常に丁寧なおもてなしを受けました。工場内は、非常にキレイ・清潔！3Sやっってるかな？と思ったぐらい。オスロSchibsted社もそうでしたが、印刷物をインサートする設備に圧倒されました。北欧の印刷には、中綴じ用の「ステッチ」が入り、なおかつ3方出し断裁も施され、頁数も多い。まさに雑誌。我々の持つ新聞の概念と、かなり隔たりがあると感じました。ちなみにノルウェーの年間労働時間は、1420時間。ゆっくりと読む時間があるのだと想像しています。文化・人口・産業構造の違い等から、視点・要求の違いに気づかされました。各訪問先の共通点は、直面する問題に対し、挑戦する意欲が旺盛な事でした。非常に参考になりました。

＊

オスロでは、国立美術館のムンクの部屋で、現地ツアーガイドさんが、ムンクの「叫び」に繋がるまでの作品を丁寧に紹介して頂き、作品の逸話が良く分かりました。私は、BSの「路面電車の旅」と言う番組が好きで、オスロの路面電車は、イメージ通りでした。さよならパーティー終了後、水黒氏、古舘氏、水本氏を誘い「いざ、乗ろう！」「どの路線で行けばいい？」「帰りはどうする？」のやり取りの結果、「何とかなるよ」の結論にJTBさん方は、少し不安顔。その姿を置きざりに、乗車しました。「感動、感動！」帰りは、少々不安でしたが、ホテルのビルが見えたたん、急に気が大きくなり「飲んで行こう！」と、ツアー最後の夜をオスロの飲み屋で反省会をしました。本当に楽しい、決して忘れることのないすばらしい旅行ができました事、ツアーの皆様方、JTBと現地ガイドさんに感謝致します。追伸：当分、ポテトは食べません。冬季オリンピックは、フィンランドとノルウェーを応援します。

## かけがえのない経験

サカタインクス(株)  
名古屋支社営業部マネージャー

水本 信也

今回、初めてCONPT-TOURに参加させて頂きましたが、実を言いますと恥ずかしながら海外に行くのは仕事でもプライベートでも初めてと言う事でパスポートの取得からはじまり、出発前は何を準備したらいいのか、海外の食事は合うのか、また片道10時間という長時間のフライトに耐えられるのか色々不安が多く、出発前日までワクワクドキドキしていたのを思い出します。

\*

心配していた長時間の移動ですが、映画を観たり本を読んだりして過ごしましたが、やはり行きも帰りも殆ど寝れずに、帰国後しばらく時差ボケが残っていました。食事について印象に残ったのはフィンランドのヘルシンキの夕食で訪れた地元で有名な食堂のカハヴィラスオミです。ここは2006年に公開された日本映画でかもめ食堂の舞台となったところで日本人観光客も多く、スタッフに日本人の女性と流暢に日本語を話す地元の女性がいのがほっとするところでした。肝心の食事はミートボールを頂きましたが、日本人向けに調理されて食べやすかったですが正直平均的な味でした。その他の食事ではハンブルクのビアホールで食べたソーセージ・本場の黒ビール、オスロで食べたサーモンが異国情緒も手伝い大変美味しかったのですが、やはり日本食が一番美味しいと実感させられました。

\*

さて北欧の新聞社の見学についてですが、フィンランド、ノルウェーの新聞社も日本の新聞業界と同様で新聞離れが激しく印刷部数が激減しています。特徴的だったのがヘルシンキのSanomat社で発行部数が減少する中で



カハヴィラスオミでのミートボール

TV局出身者を編集長として入社させ、記者が取材時に動画も撮影する事によりWEB動画のコンテンツ配信に注力しているところでした。

ノルウェーのSchibsted社の印刷工場で印象的だったのが日本のセクション印刷や折り込みチラシに該当するインサート印刷が多い事です。先刷りしたスポーツ新聞、子供向け新聞、または外部持ち込みの印刷物をロール状にしたドラムに取り置き本紙にインサートする為、新聞は100頁以上の分厚いものとなり、新聞社の収入もインサートに頼っているようです。

\*

最後に今回CONPT-TOURに参加させて頂き御一緒させて頂きました皆様とはかけがいのない貴重な経験をさせて頂き、有難うございました。今後も末永いお付き合いをさせて頂けますようお願い申し上げます。

## 北欧の変化

ストラパック(株)  
執行役員国内営業本部 NS 営業部長

長井 博

新聞営業に6月より着任して早々、このCONPT-TOUR2015欧州新聞製作事情視察に参加させて頂く事になりました。新聞業界は初めての職場で勉強しなければならないことが沢山あるなか、視察団の副団長という大



役までお受けすることになり期待と不安が交錯しておりました。しかし気がつくと出発当日を迎えていたことを思い出します。ただ幹事役がしっかり出来ていたか、ご不便おかけしなかったかと反省してます。前職では視察で海外へ行くことは殆どなく、今回で40回目にもなるこのツアーは今までに世界各国の新聞社を視察されているとのことで驚きました。事前説明会に出席できなく出発日の成田結団式で初めて皆様にご挨拶することになり申し訳ありませんでした。機は程なく成田を定刻出発の態勢に入り、他の飛行機の離陸を窓から眺めていて、いよいよ当機の順番と思いきや何故か速度を上げず変だと思った。理由は機内放送で急病人の知らせが入りターミナルへ戻り、約1時間程遅れて無事出発。

\*

さて、最初の視察先フィンランド・ヘルシンキでAlma Mediaの最新鋭の印刷工場、環境に配慮し再生紙・リサイクルを意識し取り組んでいた。工場内設備はヒューマンエラーを極力なくするため自動化が進み製版CTPプレートはロボットアームで装着する機構。発送設備はFeragを中心に構成されていた。本社・Helsingin Sanomat社ではデジタル化に向け投資を行い様々なサービスを展開中。

ドイツのハンプルクメッセで開催されているWorld Publishing Expo 2015では各種素材を管理するコンテンツ管理システムや新しい編集・広告関連のシステムが多かった。

最後のノルウェーでは人生をテーマにした珍しいビーゲラン彫刻公園、有名なムンク「叫び」を目の前で見て、絵の意味や色々なエピソードをガイドさんより聞き少し物知りになったような気分でした。ちょうどノーベル平和賞が決定されるノルウェー議会議場の報道陣の前をバスで通過し、授賞式会場の平和センターも見ることができた。

北欧の新聞社を視察した結果、日本と同様に各社部数が減少している状況下で、デジタ

ル部門へ力を注ぎ、編集作業に於いてもWebで状況を確認しながら記事・写真・動画まで1人で行う体制を確立し効率的に取り組んでいた。新聞社のブランドイメージを強化し多様なコンテンツ(生活・健康・求人・イベント)の製作等に注力していた。

\*

最後に、今回ツアーを企画された事務局の方々、参加された皆様と短い期間でしたが一緒に出来ましたことに深く感謝申し上げます。命名された「イグノーベル会」、人々を楽しませ考えさせる会を今後とも末永く宜しくお願い申し上げます。

## 進むデジタル化

第一工業(株)

搬送システム本店技術部次長

平井 邦博

まず「デジタル化反対」と叫びたいところだが、時代は急速にデジタル化が進んでいるのが実情だ。弊社は新聞業界では下流部門でデジタル化されると縮小どころか仕事自体が無くなる可能性さえ有る。フィンランドで訪問したアルマメディア社のデリバリーにおいては新聞発行部数減少に伴い、デリバリー網を活かしてパンなどのデリバリー等も視野に入れて業務拡大を検討していると話していた。もはや何屋さんかわからなくなってしまうが。

\*

次に訪問したヘルシンギンサノマツ社ではテレビ局から引き抜かれた女性編集長が紙面を無くす方向に全力投球している事を熱弁していた。でも意外だったのがドイツWPEで聞いた世界的には発行部数が増えているという事。主にアジア圏で特にインド。ただやはりその他は急速に減少している。日本でも電車で新聞を読むおじさんを昔から比べるとかなり見かけなくなりましたが今は老

人もモバイルで記事を読む時代が来るのだろうか。

WPEの展示では下流部門の実機が無く残念ではあったが、北欧ではエコ化が日本より推進されている感じで廃棄物をほぼ全てリサイクル可能とするなど今後の設備業界に必要な技術が多く展示されていた。来年5月開催されるdrupa2016では今回のWPEより実機が多く展示される見込みなので期待したい。

\*

さて北欧は初めて訪れる場所で自分のなかでは情報が乏しく、ビールが安く飲める事くらいしか知らなかった。ビールは決して嫌いでは無いのでちょっと期待しつつ最初に訪れたフィンランドでは夕食後、酒好き？メンバーとご一緒させて頂き、BARへ入った。さあ5〜6杯飲んでも2〜3千円くらいかな〜なんて思っていたが、期待外れのグラスで千円強。しかもどれを飲んでも旨いかと思いきやとんでもない味の地ビールを注文してしまったメンバーもいた。



胸ふくらんだビールサーバ

今回CONPT-TOURに初めて参加させて頂き、参加者名簿を見た時は錚々たるメンバーで恐縮したが、各国2泊ずつの忙しい旅を非常に楽しく過ごさせて頂きました。毎回のようには晩飯では飲み過ぎ追加料金を徴収されるくらい飲んだ挙句部屋飲み。国内でこのメンバーでは、なかなか出来ない事を短い期間でたくさん経験させて頂きました。さよならパーティーでイグノーベル会と命名されたこの貴重なメンバーと末永くお付き合いさせて頂きたいと思います。

## 皆様に感謝

(株)椿本チエイン

マテハン事業部新聞営業技術課課長代理

有年 志貴

CONPT-TOUR申込みの締切りぎりぎりの段階で会社より参加せよとの話があり、快諾したその日の内に申込書を作成し送付というばたばたした状態でのスタートでした。

約20年振りの海外で新たに準備しなくてはいけないと思ったものも多かったのですが、その後もばたばた状態は続き、日程に追われ自分の準備もままならないまま日々は過ぎました。気が付いたら旅行説明会、もう2週間しかない時にはまだ何も旅行の準備が進んでいませんでした。出発の前日も夜からスーツケースに荷物を詰めはじめ、あれ買うのを忘れてたと気が付いたものを夜中に買いに行き、準備ができた朝になりそのまま出発となりました。

\*

翌日からの工場視察では、日本との印刷形態の違いから設備の違いを実感しました。巻取紙搬送設備では、巻取紙を連続で供給し続ける日本と異なり、輪転機の印刷速度や1媒体の印刷部数の違いなどにより巻取紙供給ピッチの間隔が広いことから、簡素化されたシステムであると感じました。その中でも大きな設備の違いを感じたのはやはり発送設備でした。工場の説明会の中でも時間を取って説明頂いただけあって、インサーターやステッチャーなど諸外国では一般的かもしれませんが、日本との違いに驚くことが多く、これは何をするための設備だろうと新鮮な気持ちで見学ができた工場視察でした。

そのほか、フィンランド、ノルウェーそれぞれの新聞社の今後の展望やWorld Publishing Expo2015でのお話など、興味深いお話を聞くことができました。

また、今回のツアーで訪れたフィンランド、

ドイツ、ノルウェーそれぞれの街並みに憧れたり、ドイツでプチ迷子になったり、皆様とのお食事や寝る間を惜しんでお酒を飲んだりと楽しく過ごさせて頂いた視察でした。



オスロの街並み

最後になりますが、終わってみると慌ただしく過ごした8日間でしたが、自分自身にとっては大いに意義のある視察でした。また、今回企画運営された方々、団長、副団長、幹事の皆様をはじめ、ご同行頂きました皆様には深く感謝申し上げますと共に、今後とも末永いお付き合いのほど、よろしくお願いします。

## ジャガイモの七変化

(株)東京機械製作所

第一事業部国内販売グループ営業部長

松坂 浩

新婚旅行以来、約20年ぶりの海外渡航が、初参加となるCONPTツアーということで、出発前は期待と不安が入り混じった複雑な心境でしたが、いざツアーがスタートしてみると、今回のツアーも恒例の弾丸ツアーで、毎日が目まぐるしく新鮮で楽しいツアーでした。

北欧は予想通り、街並みも女性も美しく、鼻の下を伸ばしておりましたが、食事には困りました。食いしん坊の私としては、食事は今回のツアーの最大の関心事の一つです。北欧というとサーモンを予想していたのです

が、いつもお皿一杯に出てくるのはジャガイモです。ジャガイモが姿・形を変え、これでもかと何度も登場しておりました。まさに一生分のジャガイモを食べた心境です。私自身ジャガイモは大好きなのですが、その影響からか帰国してからは、一度もジャガイモを食べておりません。なぜ、ジャガイモが多い食卓で、スラッとした美人が多いのか、大いに疑問でした。ヘルシンキでは、一番おいしいとネットにある〇〇〇食堂にも行ったのですが、「？」でした。やっぱりネットの口コミはあてにならない。新聞が一番だねと確信した次第です。



食べ物ばかりの話だと「また、お前は本能のままに生活してきたな」と上司に叱られますので、視察に関する話をさせて下さい。北欧の新聞社視察では、広告紙掲載に注力した合理化と効率化に徹した印刷工場を見学させて頂きました。まさにヨーロッパスタイルの発送に力点を置いた印刷工場は、ロボット等を投入したコンピューター省力機器が整然と配置され、印刷員というよりもシステム管理者が管理する印刷工場でした。

\*

新聞製作現場においては、「デジタル」というキーワードが氾濫しておりましたが、実際の収益構造は「紙」に頼らざるを得ない現状があり、各社ともそのジレンマに苦しんでいる状況が痛いほど伝わってまいりました。「デ

ジタル」による情報提供をいかに収益に結びつけていくことが大きな課題と言えます。これは、新聞の先進国の共通の課題であると思われれます。リストラを行っている最中の新聞社もあり、紙とデジタルによる両方の記事作成スキルが要求される新聞製作現場に情報産業の人材の多角化を見ることができました。

\*

IFRAの講演では、先進諸国の新聞部数減は底を打ち、全世界的には「紙」の新聞は増加しているとの話がありましたが、展示ブースにおいては、印刷機の実機展示はなく寂しい状況でした。しかし、スイスにおいてデジタル印刷機での新聞印刷が開始された報告もあり、きめ細かい情報提供が要求される多品種小ロットへの対応ニーズが高まる新聞印刷の新しいスタイルが確実に顕在化しつつあります。来年のdrupa2016にはビジネスモデルが確立したデジタル印刷機が大きなポイントになることを予見させるような事例だと思われます。

最後になりましたが、このツアーを成功させるために懇話会事務局・団長・副団長・幹事の皆様には大変お世話になりました。また、参加された方々に厚くお礼を申し上げます。今後とも末永くお付き合いをさせて頂きたく、よろしくお願い申し上げます。

## 人材育成課題発見

東洋インキ㈱

インキ営業本部新聞インキ営業部部長

大谷 浩

今回が、3度目のCONPT-TOUR参加。1度目は、30代でアメリカ視察。2日目のナイアガラ観光帰りの飛行機が欠航。やむを得ず夜行バスを乗り継ぎニューヨークへ戻る強行軍で、すっかりペースが狂い、クタクタになった事を記憶している。2度目は、40代でアムステルダムのWPE視察。4泊6日の弾丸

TOURだったが、すっかり業界内のお知り合いも増えており、充実した時間を過ごさせて頂いた。

今回は、50代で北欧視察。益々業界内のお知り合いも増えており、更に充実の日々を期待してTOUR参加を申し込んだが、事情により団長の大役を拝命した。入社以来新聞業界にお世話になって四半世紀が経ち、「自分もそんな年齢になったのか？」とガッカリしつつ身が引き締まる思いがした。

\*

視察2か国目、ドイツ・ハンブルクの現地ガイド「イチコ」女史。ハンブルクに住民票を移して36年との事だが、話の端々にご当地愛が強く感じ取れる。ハンブルク到着後、WAN-IFRAとのアポイントまで余裕があり、市内散策の時間ができた。オランダ視察時の例に倣い、当地産の陶磁器土産を購入しようと女史に尋ねた。お褒めのお店を教えてください。地理不案内の為モタモタしていると、「一緒に行こう！但し、私の時給は125€！」とブラックジョークで先制された。果たして女史ご推奨のお店は見つからず(移転?)、やむなくバスへ戻ることに。バスへの帰路女史お褒めのレストランを覗くと、女史曰く「著名な同店副料理長？」が休憩中。ご一緒していた方々と、副料理長を囲んで記念撮影。その後バスへの近道とのことで、女史に連れられ、ハンブルク商工会議所をショートカットする事に。女史曰く「一般者は通り抜けできないが、私は会員だから大丈夫！」との事。解説によると同所玄関脇にあるのは、守り神のマーキュリー像(商売の神)。(後日写真を確認するもマーキュリーではないと判明)受付の女性に何やら話し掛け、同所2階のホールを見学し、同所を通り抜ける。その後、会議所と市庁舎の間の中庭をぬけ市庁舎内へ。同所一階のホールは一般者の入場可だが、女史は更に入場不可の上階へ。女史曰く「上階ではハンブルク市長の会見中」との事。我々

一団を制するガードマンに対し、「この人達は、日本のPRESSだから！と伝えた」との談。上階の広間を抜けると、その奥が会見場。2人目のガードマンも前述の押しで突破。ガードマンは怪訝そうに我々を見るも、取りつく島もない押しの強さ。とうとう会見場に到達した。女史曰く「会見内容は、FIFA会長批判」との事だったが、後日談では「エコカー優遇措置会見」との事。真実は？

今回の視察で、最も勉強になった事の一つは「異国で生き抜く秘訣は、押しの強さ？ハッター(失礼)？」今後の社内人材育成に役立てたい。

\*

さて、TOURは体調不良者もなく、全員無事に帰国しました。団長らしい事は何もせず、お役に立てなかったと猛省しております。TOURの成功は、事務局、JTBの方々のご尽力と、参加メンバーの方々のご協力のお陰と感謝いたします。

## 革新にチャレンジする北欧の新聞社

日本アグファ・ゲバルト(株)

執行役員グラフィックシステム事業部長

東條 好光

Finn Airの機体が成田のゲートを離れて滑走路に向かい、いざヘルシンキに向けて離陸という直前で機長からのアナウンス。「急病人が出たため人命優先でゲートに戻ります」というハプニングがあり出鼻を挫かれた。だが、このハプニングが残りのツアーの厄を払い取ってくれたと思える程、その後の旅程は順調に進み思い出深く、非常に有意義な8日間となった。

CONPT



TOURは初参加であり、新聞社の上流工程を視察するのも初めてであったが、新聞の上流工程でも革新を続けて行かないと生き残れない事を肌で感じさせられた。一番強烈だったのはHelsingin Sanomatで編集長を担当するPaivi Anttikoski女史の発言である。

Paiviさんは同社のテレビ局から新聞の編集責任者に異動してきて1年足らず。新聞の編集制作の責任者でありながら、自分の子供がタブレットで遊んでいる写



Paivi Anttikoski氏

真をスライドに映し「紙の新聞はなくなる」と言い切る。紙で成り立っている我々のビジネスにはショッキングな内容であった。更に誰もが興味を惹くコンテンツに工夫を加えないと生き残れないと言う。

\*

一方、ハンブルクで開催されたWPE2015展で、最初にWAN-IFRAの副CEOであるManfred Werfel氏による業界動向のプレゼンを受けた。同氏によるとアメリカの新聞の発行部数が下げ止りとなった事が報告され新聞にも微かな



Manfred Werfel氏

明るい兆しが見えて来た。私には初めての視察であったが、IFRA展を知っていると昔の活況はないと言う。各社成長のネ

タを模索していると感じられた。下流工程で視察した印刷会社は偶然にも2社(Alma Manu OyとSchibsted Trykk)と

もAGFAユーザーであった。2社を視察して印象に残った事は①刷版の仕分けと搬送の自動化②大輪のインサーターを使用した新聞折込の自動化である。2社とも人が少なく省人化した生産体制でコストダウンを極限までチャレンジしている。



刷版ルーム

ツアー最後の恒例の「すき焼き」は格別に美味しかった。日本酒も飲みたかったがノルウェーの物価は日本の5～6倍にも上り、高すぎて諦めたのが心残りである。参加者の皆さんとは末永いお付き合いをお願いして結びとしたい。

## デジタルへ思い切った投資

富士通㈱ メディア営業統括部  
第一営業部シニアマネージャー

大林 智和

今回の欧州ツアーに参加し、改めて新聞社動向を広い視野・観点で見られたのは非常に有意義であった。今回ノルウェー、フィンランド2カ国の新聞社を訪問。新聞市場は日本同様厳しい状況下であった。日本と異なる点は、

- 積極的なM&Aによる強みを生かす
- デジタルへの思い切った投資
- 若手、女性の積極的活用

デジタルへの取り組みは、まだ発展途上ながら、放送局トップ人材を新聞トップに据え組織改革とデジタルシフトを実行。

しかしながら、収入の主軸はまだ「紙」依存

比率が断然高く、デジタルと紙の新聞制作を併用している。デジタルは、Analys機能をつル活用し、マーケティングに力を入れている。



アルマメディア社印刷工場内のプレゼン

世の中の動向が見えにくい今、思い切った決断と実行力、そしてチャレンジングな環境は、今後の自分自身の仕事環境の中に取り入れて行きたい。

＊

また、今回のCONPTツアーに参加させていただき、いろんな方々とお話させていただいたことが一番の財産となった。下流系に携われている方が多く、初めての方が大半の中、それが反対に新鮮であり、人脈の幅が広がった。今回のネットワークを大切にし、お客様に貢献できるよう、今後とも取り組んでいきたい。

## ボーダーレス (borderless)

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ㈱  
新聞営業部販売一課

半田 達也

ソーセージ。そしてビール。ドイツといえばこの2つを思い浮かべる方が多いと思います。実際に食してみて、やっぱり旨い。ドイツで屈指のビアホール“ミュンヘン”で食べたソーセージとビールの組み合わせは絶品、味・種類とそのボリュームに圧巻でした。お隣の諸先輩テーブルからもソーセージを頂いて、

かなり大満腹。我がお腹に一片の隙間なし。JTBさんに勧められて飲んだ「ヴァイツェン（白ビール）」もとてもフルーティーで美味しかったです。ドイツに行かれる際は、ぜひお試しを。



ハンブルクでのお肉とポテト

また、ドイツでは迷子にもなりました。ハンブルクの教会の鐘の音に導かれるように迷子に…。焦りました。団長への電話もつながらず。かなり焦りました。i-pad片手に30分ほど港町を独りで駆け回った経験は、きっと次のマラソン大会にいきてくることでしょう。地元の人に道を聞いて、どうにか辿り着いたのは良い思い出です。平井さん（第一工業）、汗拭きシートありがとうございました。

＊

本題の視察では、北欧の新聞社を見学しました。「デジタルへの移行」、「広大な土地での新聞配達」、「折込業務の内製化」といった各新聞社の独自のアプローチを見学した中で、ある新聞社の方からのコメントが胸に残っています。「紙だけ、もしくはデジタルだけに従事する社員はいない」といった主旨の発言を受け、逆らいようのないデジタルの波を強く感じると同時に、1人何役もこなす「なりふり構わない」必死さのようなものを感じました。事情の異なる日本でも、今回見学した雑多な意味での“ボーダーレス”な取り組みは、きっと他人事ではない事象なのだ、と考えさせられながら、いつの間にか食事会へと

流れ込むのでした。

＊

ドタバタの中、いつの間にか「CONPT-TOUR」に突入していたというのが本音です。少し動けば汗ばむ10月初めの日本とはうってかわって、吐く息が白くなる身を切るようなフィンランドの空気でTOUR開始を実感したのを覚えています。何をしたか・出来たか判りませんが、出身も会社も職種も年代も違う、色々な方と貴重な時間を共有出来たこと、“ボーダーレス”なお付き合いができたことが私にとって何事にも代え難い貴重な経験です。また、お疲れのところ「居酒屋はんちゃん」にご来店頂き、ありがとうございました。引き続き、場所をかえても「はんちゃん」と呼んで頂けるのを楽しみにしております。最後に、稚拙な文章を最後まで読んで頂いた皆様に御礼申し上げます。まいど、お一きに！！

## 遠くて近いヘルシンキ

三菱重工印刷紙工機械(株)  
営業本部東日本支社  
新聞輪転機担当部長代理

佐々木 健

最近流行りの北極圏ルート、フィン・エア－は、少しでも欧州渡航の負担を軽減したい、旅慣れた旅行者でいっぱいだった。

目指すはヘルシンキ。スキージャンプ競技に興味ある人には馴染みのニッカネン選手、アホネン選手。おバカ映画からカンヌグランプリ映画までカバーする奇オアキ・カウリスマキ監督(前者は「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」、後者は「過去のない男」)。

いやいや、そんなサイド情報以上に、我ら日本人にとって親しみを覚える情報は、フィンランド人のお尻にも蒙古斑があるらしい。

いずれにしても、遠く離れた日本では、あまり馴染みのない国フィンランド。

街を歩く人々をよく見ると、すらり背の高い北欧ハンサム・美人。

「あれ、アイツに似てる」、とわが友人の面影を持つ人もいないではないか。

歴史教科書で見た、チングス・ハーンが北へ西へ伸ばした勢力図には、スカンジナビアの地も含まれていたような。

私たちコンプトツアーが宿泊した、ヘルシンキのホテル地下には、フィンランドの文化とも言えるサウナが備えられていた。

生来、恥ずかしがり屋の私としては、残念ながらサウナをのぞくことに躊躇。

「欧州新聞(を中心とした文化)事情視察団」の副団長として、積極・好奇心が不可欠であったはずなのに。

今、帰国して悔やまれることは、「フィン

ランド人にも本当に蒙古斑が出るのか」

もし、サウナの中、「オレの蒙古斑はこんなに大きかった」とフィンランド人と自慢し合っていたら、きっと、もっと理解できていたのかもしれない。

なぜ、フィンランドの新聞発行は、朝刊印刷を「1極集中・高速輪転機をもって」「複数主要新聞社紙」を「工程干渉なくできるのか」、

朝刊配達を「パンなどのグロッセリーといっしょに配達できるのか」、を。

\*

たくさんの不思議を共に経験できたことに、あらためてコンプトツアーに参加された方々、事務局の方々に感謝、深謝！

## 〈CONPT-TOUR 2015 日程表〉

| 日次 | 月日        | 地名                | スケジュール                             |
|----|-----------|-------------------|------------------------------------|
| 1  | 10月4日(日)  | 東京(成田)発<br>ヘルシンキ着 | 空路 ヘルシンキへ                          |
| 2  | 10月5日(月)  | ヘルシンキ             | アルマ メディア本社、工場視察<br>ヘルシンギン サノマット社視察 |
| 3  | 10月6日(火)  | ヘルシンキ発<br>ハンブルク着  | World Publishing Expo 2015視察       |
| 4  | 10月7日(水)  | ハンブルク             | World Publishing Expo 2015視察       |
| 5  | 10月8日(木)  | ハンブルク発<br>オスロ着    | シブステッド社視察                          |
| 6  | 10月9日(金)  | オスロ               | 現地研修会                              |
| 7  | 10月10日(土) | オスロ発              | 空路 東京(成田)へ                         |
| 8  | 10月11日(日) | 東京(成田)着           | 到着後、流れ解散                           |





**アルマ メディア社**  
(ストラパック・長井博氏)



**オスロ市庁舎**  
(信濃毎日新聞社・古岩井和彦氏)



全員集合=WPE(ハンブルクにて)



**怒った少年(オスロ・ヴィー格兰彫刻公園)**  
(第一工業・平井邦博氏)



**さよならパーティー**  
(富士通・大林智和氏)



# 楽事万歳

## 妄想のアングラ

福井新聞社 専務取締役

福井新聞印刷センター 代表取締役社長

竹島 栄実

1時間幸せになりたかったら酒を飲みなさい

3日間幸せになりたかったら結婚しなさい

8日間幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい

永遠に幸せになりたかったら釣りを覚えなさい

中国の古い諺である。

＊

北陸は10月、釣りには最適のシーズンになる。近年人気のアオリイカをはじめ、スズキや黒鯛、ヒラマサやハマチなどの青物も岸近くに寄ってくる。港の堤防はアジのファミリーフィッシングでにぎわう。

海とつながった湖のほとりで育った私にとって、釣りは手っ取り早い遊びの1つだった。湖から海へ。年とともにフィールドは広がり、十数年前からは年甲斐もなくルアーフィッシングにもはまった。こうなるともう止まらない。魚種や釣法、フィールドによって異なる釣り具が必要になる。妻からは「釣具屋さんを開くの？」と皮肉を言われながら書斎の一角に季節、季節の魚種に合った釣り具を並べては妄想を膨らませる。

こう書いてくると、暇さえあればいつも竿を振っているように聞こえるが、実はそれがままならない。若いころは出勤前にスズキを釣って仕事帰りには黒鯛狙い—なんてこともあったが、今ではとても体力がもたない。となれば週末釣行に期待するしかない。でも春秋のいい季節は各種イベントも多く、なか



か休みが取れない。やっと休みになると強風、荒波。

さらには近年、日本海側でも異変が起きている。定置網で熱帯性の魚がよく獲れ、30年前には日本海ではほとんど見ることのなかったサワラが群れをなしている。今年に限って言えば、湖で手軽に楽しめたスズキのルアー釣りが全くと言っていいほど釣れない。秋口には「当たり年」と期待されたアオリイカもシーズンに入ると渋い状態が続いている。

おかげで10年来続いている釣りブログは更新できず、春先の小さなセイゴが寂しげにトップページを飾っている。活躍することのなかったロッドやリール、ルアーは、釣果もないまま来シーズンまで長い眠りにつく。

＊

釣りの魅力は「想像力」だと思う。釣った魚の大きさでもなければ、数でもない。「ここにいるはず」の魚を「お気に入りのこの仕掛けで」「この時間に」狙ってドンピシャリと当たった時の快感である。ほとんどは外れるのだが…。

したがって、私は船で釣るのは良しとしない。魚探で魚たちの居場所を確認し、頭上から狙うのは卑怯である。水際を挟んで陸と水中で対峙し対等にやりあうのが釣りだろう。釣りとは漁は違う。ただ仲間たちは「船酔いが怖いから講釈を垂れているだけ」と言う。そうは思いたくないが、否定はしない。船舶免許は制度ができると同時に取得したが、机の引き出しに眠ったまま更新だけを繰り返している。おかげで父譲りの釣り船は魚探、GPSを付けたまま、今年知人に譲った。

＊

「磯へ行くより部屋で竿を振っていた方が危ないからいいよね」妻のからかいには聞こえないふりをして、秋の夜長これから冬に向けての道具を点検する。「いつかは北海道の朱鞠内湖でイトウを釣り上げる」頭の中は夢と妄想が駆け巡る。至福のときである。

# わが職場

## 私の職場案内

福島民報社 印刷局次長兼印刷管理部長 我妻 秀一

福島民報印刷センターは、福島市の福島駅から西に約5キロのところにあります。吾妻山がきれいに見えます。平成7年の福島国体の開催を機に福島駅そばの本社内から移転し、今年で20年を迎えました。平成23年の東日本大震災では震度5強の大きな揺れで天井の配管が破断しましたが、夜の朝刊印刷も速度を落としながらも休まずできました。私が印刷局に異動してきたのは東日本大震災の翌年でした。総務局からの異動でした。広告局営業部入社以来営業、総務と仕事をして、初めて印刷の現場で生産業務を体験するとは夢にも思いませんでした。

印刷局での私の業務は、年間予算作成、見積り書の精査と稟議書作成、印刷部員の休暇の調整、物品の管理など、管理業務中心に多岐にわたります。印刷現場については今も勉強中です。24年からは読者に新聞印刷の現場を見学してもらう「ナイトツアー」を始めました。今年是一般の読者が見学できるツアーを3回実施したほか、夏休みの課外学習の一部になるように「親子ナイトツアー」を2回実施し、合わせて約100人の読者が参加してくれました。福島民報印刷センターの懸案事項は、21年目を迎えた輪転機、発送設備などの更新です。大震災後の復興途中で、さまざまな課題はありますが皆さんの力を借りながらより良い新工場づくりを目指していきたいと考えています。

## 毎日新聞首都圏センター 海老名工場

(株)毎日新聞首都圏センター 海老名工場 印刷担当部長 長谷川 徹

神奈川県中央部に位置する厚木市南部に、毎日新聞社の10番目の印刷拠点、「毎日新聞厚木センター」として1988年4月に創業しました。東名厚木インター料金所のすぐ横で、輸送に最適の立地でした。

創業時の従業員は、毎日新聞社からの経験者数名のほかは、NKKからの出向者、地元採用の新入社員で、大半が未経験者ばかりでした。初期トラブルの続発と技術的に未習熟な部分があり、損紙が山のように発生した時期もありました。

2007年10月に厚木市の隣、海老名市に新工場を建設、「毎日新聞首都圏センター海老名工場」へと移行しました。

新聞輪転機4セットと商業輪転機2セット体制でスタートしましたが、商業印刷部門は2013年4月、同じ毎日グループの高速オフセットに移管しました。新聞印刷の1セットはパノラマ印刷装置を装備しています。また5セクション(48頁)まで一括印刷が可能です。商業印刷ではハガキ2枚貼り印刷も行っています。新聞と商業で、経営母体は異なりましたが、同じ輪転場で連絡を密に協力して作業しています。

2014年2月には想定外の記録的大雪で周辺の道路がマヒ状態となり、輸送トラックが着車できなくなるトラブルもありました。融雪剤や除雪道具、社員が臨泊するための寝袋を買い揃えましたが、昨冬は出番がありませんでした。さて、この冬はどうなるやら…

## 新入会のことば

キヤノンプロダクションプリンティングシステムズ(株)  
取締役 常務執行役員

作田 勉

この度、日本新聞製作技術懇話会に入会させて頂き大変光栄に存じます。またご推薦を頂きましたサカタインクス株式会社、富士通株式会社におかれましては、この場を借りてお礼申し上げます。

さて、弊社はキヤノンマーケティングジャパン株式会社の100%子会社であり、キヤノングループのプロダクション事業の中核を担う会社として2014年4月に発足致しました。

主な事業内容として、オセ&キヤノンのプロダクション機器(オンデマンド機)の販売と保守、オンデマンド用後加工機の販売と保守、印刷ワークフローシステムの開発・販売・保守、プリントサービス事業となっております。

昨今の新聞業界を取巻く環境は大きく変化しており、既存ビジネスモデルと両立する新たなビジネスモデルが求められています。その様な中、弊社ではデジタル印刷機を使った「オンデマンド型ビジネスモデル」の研究・開拓に取り組んでおります。それにより新聞業界全体の活性化と発展に繋がればと思っております。

またこれまでキヤノングループ全体では、デジタルカメラ、カラープルーフ、基幹系・情報系システム、オフィスデバイス等といった分野で新聞業界にお世話になってまいりました。今回デジタル印刷機が加わった事により、今後は上流系・下流系の懇話会員社様とコラボレーションする機会も増えると思います。その際は微力ではございますが、皆様と共に新聞業界発展の為に尽力していく所存でございます。

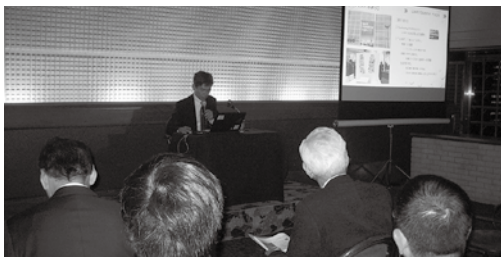
先にも記述した通り、「新しい会社」であり「新参者」の若輩者ではございますが、今後と

もご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

## 第116回技術懇談会記

### CONPT-TOUR2015報告会大盛況

CONPT-TOUR2015の帰国報告会が、第116回技術懇談会として11月13日(金)午後3時45分から「アラスカ」で行われた＝写真。ハンブルクでのWorld Publishing Expo (WPE)視察のほか、ヘルシンキ、オスロという北欧2都市の新聞製作事情を探訪してきた報告会のせい、聴衆は120人という近來にない大人数を集めた。新聞社関係27社54人、会員社23社56人(その他10人)という内訳で、数字の上では新聞社、製作技術業界の興味度合は相半ばした感じだ。



都並清史クラブ副委員長の司会進行で、大谷浩団長(東洋インキ)が「成果を上げて無事帰国できた」と挨拶した後、まず黒澤勇氏(共同)がWPE展とAlma Media、Helsingin Sanomat、Schibstedの新聞3社をビジネス展開面から見た報告を行った。ついで竹内伸吾氏(富士通)が見学先をシステム技術の観点から、小澤一彰氏(日経東京製作センター)がAlma社、Schibsted社両工場の製作現場を報告した。

終了後、借り切ったアラスカで懇親会が開かれ、これにも80人を超える大勢の人たちが出席した。新聞社幹部や報告者を囲んで約1時間半和やかに歓談が続いた。懇親会は「来年5月31日からのdrupa展にTOUR2016を派

遣したい」と、矢森企画委員長の宣言入り中締めでお開きとなった。

(事務局)

## 第68回新聞大会に参加

第68回新聞大会は、10月15日(木) 29年ぶりに大阪で開催された。CONPT関係者は上坂義明会長はじめ評議員ら5人が参加した。昨年に続き、新聞に消費税の軽減税率を求める特別決議を採択したほか、27年度新聞協会賞の授与式が行われ技術部門では、読売新聞社の「新聞用完全無処理CTPプレートの開発と実用化」に贈られた。

白石興二郎協会長は冒頭の挨拶で「18歳選挙権を追い風に無購読者対策を展開していこう」などと挨拶した。研究座談会は「新聞界が直面する諸課題」をテーマに、まず注目の消費税問題について論議を深めた。協会プロジェクトチームは、①再増税時に軽減税率が導入される方向が確定した②財務省案の還付方式は消え、簡素な方式を探る③新聞に適用されるかがポイントで、12月の税制改正大綱に向け国会議員への働きかけを続ける——と報告した。

次いで新聞販売が直面する苦境と打開策について議論が移り、新聞離れの深刻な状況が相次ぎ述べられた。打開策として、「本物である限り必ず戻ってくるので自信をもって原点に帰れ。コミュニティ再構築が新聞の役割」(小出中日社長)、「読者の育成を怠ってきた。県内小学校163校に出前授業を実施したほか、NIR(地域おこしに新聞活用)運動を展開し、しゃしゃり出ていく(小坂信毎社長)。「東北被災地で社内の読者紹介キャンペーンを行い、一定の成果を上げた。学生へのアプローチのため記者インターン制やNIB(ビジネスに活用)として朝の企業で読み方教室を実施している」(一力河北社長)、「新聞の大きさに若者とズレがある。紙面の質を高めるのは

当然だが、本当のニュースをモバイルに出すことをやっていかなければと思う。新聞は問題点の指摘で終わってきた。モバイルはコミュニティを作る力が強い。問題解決を共に考える双方向性が大事だ」(渡辺朝日社長)——などの発言があった。白石協会長は「新聞の苦境を切り拓くため、協調と競争の精神をもって頑張っていきたい」と議論を締めくくった。

(事務局)

### 会員消息

#### ■担当者変更

\*明和ゴム工業(株)(11月13日付)

[新]阿部 高廣氏

(営業本部新聞担当課長)

[旧]内藤 博彦氏(取締役新聞営業部長)

### CONPT 日誌

9月8日(火)クラブ委員会(出席8名)

14日(月)企画委員会(出席7名)

15日(火)広報委員会(出席8名)

17日(木)評議員会並びに第5回JANPS  
運営委員会(出席10名)

10月4日(日) CONPT TOUR2015出発

11日(日) CONPT TOUR2015帰国

11月10日(火)クラブ委員会(出席11名)

13日(金)企画委員会(出席8名)

第116回技術懇談会—CONPT  
TOUR報告会&懇親会(於レス  
トランアラスカ・120名参加)

17日(火)広報委員会(出席7名)

19日(木)評議員会(出席7名)

#### 訂正

9月号の目次で氏名に誤りがありました。

お詫びして訂正します。

(誤)深山 信二

(正)深山 信一